

立 切 る！

奥山京助範士旗 大谷博信教士杯争奪

第三十二回 3時間立切試合 第十二回女子の部 2時間立切試合

平成二十三年一月十六日(日)

秋田県湯沢市総合体育館

主催:湯沢市雄勝郡剣道連盟

早朝の気温は氷点下七度。年明けからの降雪は止まない。鈍色の空から垂直に間断なく降りしきる粉雪。その厳冬の中を、多くの剣士が集まってきた。間もなく立切試合の開始である。

今回の基立選手は、

川村 政明 五段(市職員 秋田県湯沢市)
原田 智徳 錬士六段(警察官 秋田県秋田市)
継枝 卓 錬士六段(会社員 岩手県)
原田 賢治 五段(警察官 福島県)
岩井川杏子 四段(教員 秋田県湯沢市)
山田 朋子 五段(主婦 秋田県秋田市)

男子は、三時間三十三名、女子は二時間二十二名の挑戦者との闘いに挑む。

◇ 開会式は、六名の基立選手入場により厳かに始まった。主催者・本郡市剣道連盟会長の前田貞一のあいさつの後、審判長の岩堀透教士八段の説辞、そして基立選手代表の川村五段による選手宣誓が行われ、熱戦への期待が高まっていく。そして十時二十五分、試合が始まった。

第1 試合場 川村政明 五段

地元代表の川村五段の持ち味は、ダイナミックな動きと大きな技であるが、この日の序盤は少し動きが固く、体が温まっていない印象。しかし、徐々に本来の動きを取り戻し、二十試合目までを十一勝二敗七分の成績。二十一試合目の佐々木健錬士六段との面の打ち合いは壮絶であったが、川村五段は転倒しながらも健闘し、気力でこの試合を制する。最終試合の相手は柴田浩義教士七段。川村五段にとって直の恩師である。師たるものの威厳と愛情を示すべく激しく打ち込む柴田教士七段と、その教えを全身全霊で受け止める川村五段。言葉を越えた師弟の絆を示しつつ川村五段は三時間を立切った。(二十一勝三敗九分)

第2 試合場 原田智徳 錬士六段

一試合目から切れのある技を繰り出す。ゆったりした構えで相手の動きを見切り、すりあげ、または出端をとらえて勝ちを重ねていく。その強さは、前回基立の打川淳五段をして「打つところがない。素晴らしいスピードだ。」と言わしめたほど。終盤に入り、わずかに疲れの色が見えたところを大友理宣六段に苦杯を喫するものの、強靱な精神力で最後まで技の切れは衰えず、驚くべき高い勝率を残して三時間を終えた。(三十勝一敗二分)

第3 試合場 継枝 卓 錬士六段

今回の基立選手中最年長の継枝錬士六段は、落ち着いた静かな立ち上がりを見せたが、次第に自分の持ち味を発揮し始め、面を誘ってその出端に強烈な小手を打ち込むなど、ゆっくりとペースをつかむ。中盤に入っても気負いや力みは見られず、粛々と相手と対峙し続ける。疲労がないはずはないが、淡々と三十三人と試合を終えられる力量は、まさしくこれまでの、そして特にこの一年間の鍛錬の賜であろう。(十二勝十三敗八分)

第4 試合場 原田賢治 五段

序盤からすべてを出し切ろうとする試合運びである。微妙な間合いの変化で相手の虚をつき、その刹那に繰り出される技が切れ、二十三試合目まで負け知らずである。二十四試合目、佐々木剛錬士七段の圧倒的な小手によって初めて土が付き、疲労も極限を迎えた。足がもつれ、あるいは相手の体当たりで転倒を繰り返す。そんな中でも遠くから面が飛ぶ瞬発力はすさまじく、仲間の熱い声援を背に三十三試合を終えた。(三十勝一敗二分)

第5 試合場 岩井川杏子 四段

地元の声援を受け、気合いも十分の滑り出し。もともと軽快かつ俊敏な動きを身上とするが、この日もそれが遺憾なく発揮され、先の先よし、後の先よしの試合ぶりである。中盤を過ぎ、前回基立の吉川百合子五段との試合では、疲れから転倒したものの、相手の小手に見事に反応して相小手面で勝ちをつかむなど、十五試合目まで負けなしの快進撃。二十一試合目では、一本取られて敗色濃厚の時間切れ間際に気迫の面で一本をとって引き分けに持ち込むなど、家族・仲間・教え子の熱い思いに応えるがんばりで、二十二試合を立ち切った。試合後の「うれしかった」という言葉が物語るものは大きい。(十六勝一敗五分)

第6 試合場 山田朋子 五段

冷静で沈着である。静かに間合いを詰め、誘っては返し、すりあげる反面、相手の出足が遅ければ面に乗るといった試合運びで、確実に勝ちを重ねていく。対戦した佐藤美歩四段は「まったくくずれない。後半になってもペースがかわらない。」と舌を巻く。二十試合目に鈴木理恵四段が気迫あふれる打ちで一勝を挙げたが、最後まで疲れを見せずに二時間立切りを終えた。(十九勝一敗二分)

◇ 熱戦の興奮さめやらぬ中、閉会式が行われた。男子は、勝率9割3分9厘で原田智徳錬士六段と原田賢治五段が並んだが、得失点差でわずかに勝った原田賢治選手に奥山京助範士旗が手渡された。女子の部では、勝率9割9厘の山田朋子五段に直心杯が授与された。挑戦者では、男子は佐々木剛七段に大谷博信教士杯が、女子は鈴木理恵四段に殊勲賞が授与された。

立切った者と基立を陰に日向に支えてきた者とは、ともに味わったであろう爽快感と満足感は、これまでの道の在りようを示して余りあったのではないだろうか。

文・写真◆木口昌也【立切試合広報担当】

